

Living the Lotus

Buddhism in Everyday Life

New Year's Issue

年頭法話

偉大なるものに参る

立正佼成会会長 庭野日鏡



いま、ここが、わが道場と受けとめ
元気で生き生きと精進していきたい

あけまして、おめでとうございます。

新型コロナウイルスの感染症法の位置づけが「五類」に移行したことで、人々の危機感は一気に薄れてきたようです。マスクをする人も少なくなってきました。一方、そうした時流に多少不安感を抱く人もいと聞きます。特にご高齢の方、疾患のある方、ワクチンを打てない方などへの配慮は、今後も忘れないようにしましょう。

日本でコロナ感染者が初めて確認されたのは、令和二年一月でした。その前年の十一月に発表された「令和二年次の方針」の中で私は、「教団創立百年に向けて、一人ひとりが、『即是道場』（この処は即ち是れ道場なり）の精神をもって、そのご恩に報いてまいりたいと思います」と申し上げました。

コロナ禍による自粛生活が続く中で私たちは、この「即是道場」の精神がどれほど大切かをおのずから思い知ることになりました。

いうまでもなく「即是道場」とは、青経巻の最初

の一節を表したものです。大聖堂や教会だけが道場ではなく、家庭や職場、学校、地域社会など、私たちが居る所、住んでいる所、身を置く所、全てが自分の心を磨く道場であるということです。

コロナ禍のみならず、いかなる時も、いま、ここが、わが道場であり、求道ぐどうの場です。このことを心して歩むことが私たちの仏道しゅうじんの精進なのであります。

またコロナ禍によって、身体的、経済的、精神的な影響を受けた方が大勢おられます。なかなか立ち直れず、将来に不安を抱いている方も少なくないといわれます。

「一日は一生の縮図しゅくずである」という言葉があります。その人の一生がどういうものになるかは、今日、一日の生活を見れば分かるということです。私たちが生きるのは、過去でも未来でもなく、いま、この瞬間しゅんかんだけです。サンガと助け合って、常に元気で生き生きと精進してまいりましょう。

さて私は「令和六年次の方針」を次のようにお示しました。

「人間が現実とどに留まらないで、限りなく高いもの、尊いもの偉大なものを求めてゆく、そこに生ずるのが敬けいという心である。この敬の心が発達してくると、必ず相対的に自分の低い現実かえりを顧みてそれを恥じる心が起きてくる。人間が進歩向上する一番大切なことは敬うやまう心を発達させることであり、恥を知ることである。」

以上、先人せんじんの至言しげんに示された人間の大切な心を踏まえ、今年も私たちは信仰生活を通して、お互い様に、夫婦として、父母として、親として、未来になを担う幼少年・青年達いかを如何にして育て、人格の形成をはかるか、如何にして家ととのを斉えていくか、さらに、日本の伝統を受け継いで立派な国を打ち立てていくか、創造的に真剣に務めて参りたいと願っています。

敬う心を発達させ、恥を知ることが 人間が進歩向上する一番大事なこと

この方針にある「先人」とは、東洋思想や政治哲学の権威として知られた安岡正篤やすおかまさひろ氏です。

人間は、数百万年もの長い時間をかけて心を発達させ、やがて知性や理解力を身につけ、それを言葉や文字に表すようになってきました。そ

うした人間と他の動物にはさまざまな相違がありますが、最も決定的なのは、人間が「敬」と「恥」の心を具えていることだといわれます。

敬の心とは、現実に留まらず、限りなく高いもの、尊いもの偉大なものを求め、それに近づこうとする心であります。

例えば、本会の信者であれば、仏さまを敬い、仰ぎ、頭を垂れ、合掌礼拝します。そして、一人ひとりが、仏さまの教えの本質を把握し、自覚し、それを実践できる人間になることを誓願し、修行を重ねます。自分の願いや希望が叶うことを願うのではなく、より高い境地に近づくことを願い、精進するのです。

もっと身近には、いつも明るく、優しく、温かい先輩の信者さんに憧れ、「自分もあの人のようにになりたい」と努力する人もいることでしょう。

歴史上の偉人・賢人、習い事の師匠、スポーツ選手、文化人など、目標や手本とする人はさまざまです。

未完成な自分に飽き足らず、少しでも高い境地に近づこうという進歩向上の願いは、本来、誰もが具えている本能といえるものです。その本能が、人間の心を成長させてきた源泉なのであります。

そうした敬の心が発達してくると、おのずと至らない自分を省みて、恥じる心が生じてまいります。

「恥じる」を辞書で引くと、「自分の行為の誤り、欠点、過ち、至らなさなどを自覚し、恥ずかしく思うこと」とあります。自分の足りない部分は、自身ではなかなか気づけないものです。しかし、尊敬する人、秀でた人に出会うことによって、自分が未熟であることを思い知らされます。そして恥じることで、自らを戒め、律して、一層の努力を始めるのです。

また「読書尚友」（書物を読んで昔の賢人を友とすること）との言葉のように、古典を読むことを通して賢人から学び、己を省みることもできます。

それゆえ人間が進歩向上する上で一番大切なことは、敬う心を発達させることであり、恥を知ることなのであります。

この敬と恥は、本来一対をなすものです。敬は宗教に通じ、恥は道徳に通じるのであります。ですから宗教と道徳は、決して別々のものではなく、もともと一体であることをしっかり踏まえることが大切であります。

家庭で人間教育、人格形成につとめ 日本の伝統を基に立派な国づくりを

さらに、今年次の方針では、昨年同様、夫婦、父母、親として、未来を担う幼少年・青年達を如何にして育て、人格の形成をはかるか、如何にして家を斉えていくか、さらに、日本の伝統を受け継いで立派な国を打ち立てていくか、創造的に真剣に務めたい、と根本的な課題をお示しました。

幼少年・青年達を育成する上で一番大事なことは、社会の最小単位である家庭の中で、ご宝前を中心にして、しっかりとした人間教育、人格の形成がなされていく「齐家」(家庭を斉えること)を実現することです。

以前、私は、「父は子どもの尊敬^{まこと}の的でありたい。母は子どもの慈愛^{あまのあわれ}の座でありたい。なぜかなら、家庭は子どもの苗代^{なわしろ}だから」との言葉を紹介しました。

子どもはおのずから、父に敬の心を抱き、母を愛の対象とするといわれます。そして親の言動を見て学び、真似^{まね}をします。

ですから父親の場合は、子どもが敬するにふさわしい存在となることが最も肝心^{かんじん}なことであります。仕事中心で家庭を顧みなかったり、一方的に説教をしたり、休みの日に家庭でだらしない姿を見せたりするのは、厳^{げん}に慎^{つつし}むようにいたしましょう。

また母親は、どんな子であろうと無条件に受け入れ、温かい愛情を注ぎます。やがてわが子が大人になり、出世をした時でさえ、「どれほど苦勞するのだろう」と案じ、悲しむのが、母の愛だといわれます。

そういう父母のところに健全な子どもが育つのであります。

一方、近年は、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルとパレスチナ武装勢力間の衝突などが相次ぎ、多くの犠牲者が出ています。貧困、気候変動、環境破壊、水や食料の不足、自然災害といった問題も山積^{さんせき}しています。

課題は複雑^{いつちよういつせき}で、一朝一夕に解決するものではありませんが、私たちは、いつも足元を見つめて、あきらめずに一步一步前進していきたいものです。

これまでも申し上げてきたことですが、日本は、上代の頃、国名を「大和（やまと）」と定め、「大いなる平和」「大いなる調和」の精神を終始一貫することを、国家的な理想としてきました。

聖徳太子は、「和を以て貴しと為す」という言葉を十七条憲法の第一条に掲げられています。

こうした精神は、日本だけでなく、あらゆる国、地域に通用する普遍的な平和観であると信じます。

日本の伝統を受け継いで、日本の国をしっかりとした平和な国家にし、それを世界に及ぼしていくことが私たちの大事な歩みであります。

同時に身近には、職場や学校、地域、家庭など、いま自分のいる場所で、思いやりのある言動、菩薩行の実践を心がけたいものです。そのことを、たとえ誰に評価されなくとも地道に続けていきましょう。

「一灯照隅万灯遍照」との言葉があります。一灯照隅とは、「一隅を照らす」といわれるように、自らが灯明となって、周囲を照らすことです。万灯遍照とは、その灯火が集まって万灯となり、世の中、世界全体を明るく照らし出すことを表しています。

そういう歩みを、まず自分から踏み出したいと思います。

人生をおくる上では、思いもよらない困難な出来事に遭うことがあります。しかし人間は、苦しみや悲しみがあるからこそ、それを乗り越えるべく菩提心を起こさしめられるのであります。

「心を成長・進化させるチャンス」と受け取って、目の前の人、目の前の事柄に誠心誠意取り組んでいく——それが「即是道場」の精神であり、心田を耕すことにほかなりません。

一人ひとりが、より高きもの、大いなるものを追い求め、自らの至らざるをバネにして、一步一步進歩向上していきたいと念願しています。

（『佼成新聞』令和5年12月25日号より）